

太閤窯製の花入と陶工・小西平内

笠井今日子（当館学芸員）



図1 太閤窯製の花入

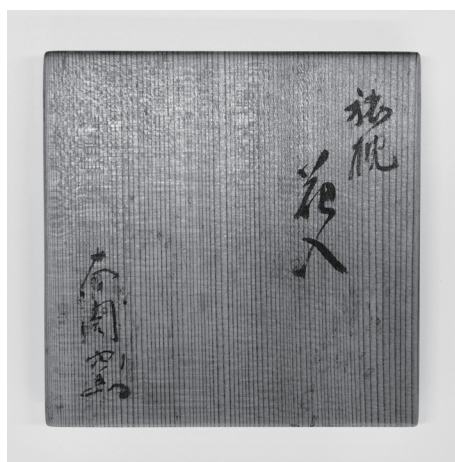


図2 箱蓋表の墨書

本資料は平成29年度アラカルト展示9月号「新収資料紹介4 太閤窯製の花入」で展示した。
展示期間：平成29年（2017）9月2日～10月1日

はじめに～資料の概要～

平成28年度に長濃タカ子氏より寄贈を受けた太閤窯製の花入を紹介する（図1）。本資料は、口径11センチメートル、高さ13センチメートルの円筒形の陶器である。箱蓋表の墨書「旅枕／花入／太閤窯」（図2）から、かつて西宮市に存在した「太閤窯」において制作された茶道具であり、背面の金具から、壁や柱に飾る「掛け花入」であることが分かる。「旅枕」は、旅寝に用いる枕を連想させる花入の形状の一種で、本資料もその特徴を備えている。また底面には、五三桐紋の窯印がみられる。

資料の来歴については、「作者である初代小西平内の身内から直接に拝領したもの」と伝わる。太閤窯は、初代小西平内が開き、二代小西平内に引継がれたが、前述の伝聞から、本資料の作者が初代小西平内であること、窯を二代目に譲った昭和39年（1964）以前の作品であることがうかがえる。

本稿では、平成29年8月に行った、初代小西平内の孫であり二代小西平内の娘

にあたる、小西余史子氏への聞き取り調査の成果をもとに、初代小西平内の経歴を振り返り、「太閤窯製の花入」を歴史資料として位置付ける。

なお、以下の文中において単に「小西平内」等と表す場合は、初代小西平内を指すこととする。

1. 出生から大阪「千里庵」時代

小西平内は、明治32年(1899)、愛媛県伊予郡中山町(現伊予市中山町)に、小西磯吉の長男として生まれた。本名を金久という。農家の生まれであったが、大正5年(1916)に上阪、大正14年(1925)頃より陶芸の道を志し、「平内」と号した。昭和3年(1928)頃には故郷伊予の江山焼を見学、昭和4年から5年にかけて道後水月焼の好川恒方に師事したという[中山町1996]。

平内が楽焼を始めたのは、昭和5年(1930)頃のこと。小西余史子氏に見せていただいた平内の初期作品は、2羽の鶏を浮き彫りにした陶板で、「千里庵」「平内」の落款がある(図3)。当館に寄贈された花入とは、まったく異なる作風である。

当時の平内の状況は、衝立の制作を取材した、昭和8年頃の新聞記事の切り抜きからうかがえる。「かくれた陶工」と紹介された平内は、「大阪吹田町玉林寺内に仮寓中」の身であり、「妻も弟子もなく僧房の一室に閉籠り、ひたすら工芸の道にいそしんでゐる人」であったそうだ。なお、取材時に制作していた作品も、衝立を飾るための楽焼の陶板で、闘牛2頭が浮き彫りにされている。

この頃より平内には、嶋田豊文という支援者がいた。嶋田は、吹田市榎坂において内科外科医院を営む医師で、やきものも自作する古美術愛好家であった。平内に古陶磁の買い方、見方の手ほどきをし、稀覯本『志野 黄瀬戸 織部』(昭和11年刊行)や月刊誌『茶わん』を読めるよう取り計らったという[朝日新聞社2009]。こうした支援もあり、平内は素養を高めていったと思われる。



図3 大阪「千里庵」時代の作品

2. 西宮市での開窯～甲子園ホテル「きのえ窯」～

平内がいつまで大阪で作陶したかは定かではない。おそらく昭和10年前後に窯を移したと推測される。新たな作陶の場を選んだのは、西宮市の甲子園ホテル(西宮市戸崎町)であった。詳細は不明だが、甲子園ホテルの初代社長・井上周の知遇を得た平内は、ホテルの地下室に住み込み、ホテルの敷地内に築いた窯で作陶を始めた。

甲子園ホテル内に築いた窯は「きのえ窯」という。この窯で焼かれたと思われ

る菓子鉢（銘「泥中ニ君子」）を見せていただいた（図4）。蓮葉を模した大鉢と小鉢の揃で、大鉢の縁に赤い蟹を一匹あしらった細工物である。箱の包紙には「初代平内前期／昭和十四年（以前）作」とある。かつて平内が師事した好川恒方の道後水月焼の影響が見られる作品である。甲子園ホテル内で制作された陶器には、「ホテル」「庭焼」「甲子園」等の銘が刻まれ、ホテルの売店に置かれたという〔三宅2009〕。



図4 甲子園ホテル時代の作品

「きのえ窯」時代の昭和16年（1941）2月、1階ロビーのショーケースに並ぶ平内の作品に目を留めた人物がいた。宿泊客として甲子園ホテルを訪れていた数奇者・川喜田半泥子である。半泥子は、富豪川喜田家の当主として三重県の財界で活躍する一方、陶芸・書画など幅広い領域で優れた作品を残した人物であった。彼は平内の窯を訪れ、ろくろを引き、地下室で薄茶をのみ、夜中まで語らった〔朝日新聞社2009〕。半泥子が出立するまでの4日間、両者の間には芸術を介した深い交流があったようだ。そしてこの半泥子との出会いを契機に、平内の作風は変貌を遂げてゆく。

平内と半泥子が出会った甲子園ホテルは、昭和5年（1930）に開業したホテルで、フランク・ロイド・ライトの弟子・遠藤新により、取締役兼支配人・林愛作の日本人が家族で滞在するためのホテル構想に沿って設計された〔黒田2016〕（註1）。甲子園ホテル開業当時のパンフレットには、「内外人 御婦人 御家族連れ」の客に向けた、「郊外」に建ち、交通が「便利」で、「家庭的」な間取・意匠をアピールするフレーズが並んでいる。半泥子はこのホテルに、娘の結婚式・披露宴のために家族で滞在していた。甲子園ホテルは、関西を中心とした財界人の社交の場として利用されていたのであり、そのホテルで窯を開いたことが、寄贈品の花入に通ずる作風へと変化する転機を平内にもたらした。平内の作品の背景には、関西の社交場としての甲子園ホテルの一面があったといえる。

3. 川喜田半泥子との交流

甲子園ホテルでの出会いをきっかけに、小西平内と川喜田半泥子の交流が始まった。その一端を示す資料が小西家に残されている。半泥子から平内に宛てられた書簡を貼り付けた風炉先屏風である。書簡には、漁師から買い求めた弁当箱を加工する作品の着想や、山の竹で作った花生のこと、手製の罫紙で乾山（註2）の伝本を筆写しようという算段が、挿絵を添えてつづられている（図5）。封筒には、昭和16年3月12日の消印、「甲子園ホテル地下室／小西平内大明神」の宛名、「津市千歳山／焼物大王拝」の差出人があり、ホテルでの出会いから約1か月後に交わされたものだと分かる。

また同年5月、平内は半泥子に呼ばれ、三重県津市の千歳山で、施釉、窯詰めから窯出しまでを手伝った。この時、平内は半泥子に入門したとされる。半泥子は「ヘイナイ」の4文字をヘラで搔き落した茶碗を制作するなど、平内との交流を深めていった〔朝日新聞社2009〕。

こうして半泥子に師事した平内であるが、この親交は新たな作陶の場をもたらすことになる。

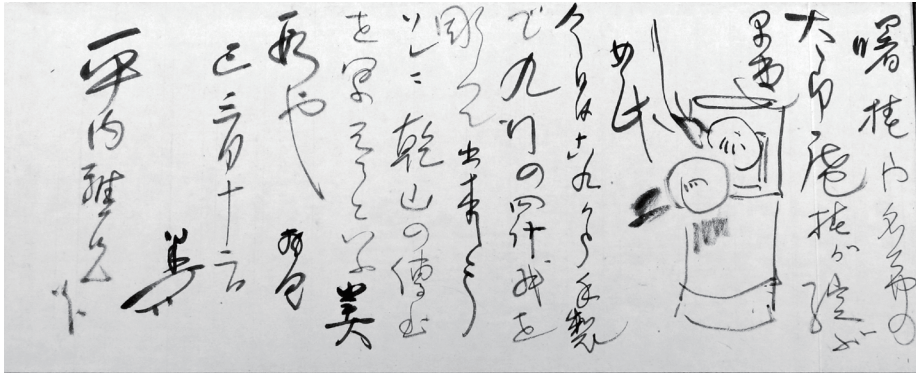


図5 風炉先屏風に貼り付けられた川喜田半泥子の書簡（部分）

4. 有馬「太閤窯」での作陶

小西平内は、昭和18年（1943）、神戸市北区有馬町に作陶の場を移した。窯名を「太閤窯」という（図6）。

「太閤窯」は、電鉄会社によって企画され、日本興業銀行によって経営された。名付けたのは、日本興業銀行総裁、大蔵大臣、日銀総裁等を歴任した結城豊太郎であった。おそらく、湯治のため有馬温泉を訪れた豊臣秀吉が、この地で茶会を催した歴史に因んでいると思われる。結城豊太郎は、百五銀行の頭取を務めた半泥子と付き合いがあった。そのためか紆余曲折を経て、半泥子の弟子であった小西平内に太閤窯での作陶の話が持ち掛けられ、引き受けることになったという。太閤窯の起こりは昭和18年だが、終戦までは窯に火を入れることができなかった〔林屋1983〕。なお、二代小西平内となる小西隆は、有馬太閤窯時代の昭和21年（1946）に入門し、翌年には半泥子に師事している。



図6 有馬「太閤窯」の写真

余史子氏によると、有馬太閤窯では、戦後、京都から職人を招き、食器類も作ったそうだ。戦後の物資不足により、需要があったためだという。また、平内は、昭和25年(1950)から続く「有馬大茶会」のプレ茶会の記念品も手掛けた。飴色の茶碗で、胴から腰にかけて五三桐紋が彫られており(図7)、「太閤窯」の銘がある(図9)。



図7 「有馬大茶会」プレ茶会の記念品

有馬太閤窯時代に、平内は初の個展を開催した。昭和29年(1954)、東京渋谷東急東横店でのことである。また、昭和32年(1957)に仁和寺で開催された川喜田半泥子の傘寿祝賀会では、かねてより親交のあった仁和寺尊寿院の僧侶・木田寛暁を介して、五島慶太と関係を築いた。五島慶太の後援もあり、平内の作品の評価はますます高まり、デパートなどで開かれる全国の名茶陶展に招待出品されるまでになったという[青木1970]。有馬での作陶は、西宮市に移住する昭和33年(1958)まで続いた。

5. 再び、西宮市での作陶～甲山「太閤窯」～

昭和33年(1958)、小西平内は再び西宮市に窯を築くことになる。余史子氏によると、平内には「もともと縁のある西宮市に住みたいという気持ちがあった」ようで、甲山神呪寺境内の茶屋が空き家になる話を持ち掛けられ、移住が決まった。

平内は、茶屋の敷地に有馬時代と同様に内窯と登窯を設けた(図8)。窯名は引き続き「太閤窯」とした。しかし、山が近く、登窯には2、3回しか火入れできなかつたそうだ。この登窯は阪神淡路大震災で倒壊し、今はない。甲山に移窯した平内だが、有馬に土地を残して年数回はタクシーで通っていたという。二代小西平内の談話によると、有馬の窯場付近には非常に良質な、木節をかんだ粘土があり、甲山に移ってから土を運び、なくなるまで使っていたそうだ[林屋1983]。



図8 甲山「太閤窯」と初代小西平内(左)

西宮市に窯を移した昭和33年、平内は弟子で甥の隆を養子に迎えた。そして昭和39年(1964)、隠居して「太平」に改名し、「平内」を二代目に譲った。甲山太閤窯の初代と二代目の作品は、窯印によって区別される。同じ五三桐紋だが、

初代は陰刻、二代目は陽刻で丸枠がある（図9）。寄贈資料の花入に刻まれた窯印は、陰刻の五三桐紋であり、初代小西平内によって甲山太閤窯で制作された作品の一つであることを示している。



図9 「太閤窯」の窯印（左：有馬太閤窯、中：初代小西平内、右：二代小西平内）

おわりに

初代小西平内は、西宮市の甲子園ホテルを開窯の地に選び、そこで作風を変える人物と出会った。一時は有馬に移転したものの、西宮市に戻って再び窯を築き、平成3年（1991）に甲山で生涯を終えた。寄贈資料の花入は、小西平内が陶工としての晩年にあたる甲山太閤窯時代に制作した作品であり、この作品に到達するまでの作陶の歴史を内包しているといえる。「太閤窯製の花入」を通して、西宮市に縁の深い小西平内の生涯を見るとともに、陶工としての転機をもたらした西宮市の社会的環境がうかがえるのではないだろうか。

本稿を執筆するにあたり、小西余史子氏より格別の御協力を賜った。閲覧させていただいた、初代小西平内の作品や縁の品々、写真等は、全てを紹介しきれなかった程である。ここに深謝の意を表する。

註

(1) 甲子園ホテルの建造物は、現在、国の登録文化財となり、武庫川女子大学甲子園会館として利用されている。

(2) 川喜多半泥子は、尾形乾山に関する研究書『乾山考』を昭和18年（1943）に刊行している。

参考文献

青木重雄『兵庫のやきもの』（神戸っ子編集室、1970年）

林屋晴三編『現代日本の陶芸 第十巻 現代の茶陶』（講談社、1983年）

中山町誌編纂委員会編『中山町誌』（中山町、1996年）

三宅正弘『甲子園ホテル物語 西の帝国ホテルとフランク・ロイド・ライト』（東方出版、2009年）

朝日新聞社事業本部名古屋企画事業チームほか編『「川喜多半泥子のすべて」図録』（朝日新聞社、2009年）

矢部良明ほか編『角川日本陶磁大辞典』（角川学芸出版、2011年）

黒田智子「甲子園ホテルのシンボルマーク・打出の小槌の意図と背景—開業当時のパンフレットに着目して—」（『武庫川女子大学生生活美学研究所紀要』26号、2016年）

収蔵施設の機能向上について～収蔵庫防水扉設置工事～

俵谷和子（当館学芸員）

平成 25 年度に策定した「西宮市における文化財の保存と活用に関する総合的な計画」には、6つの基本的な考え方が明示されている。5つ目に掲げられた「文化財保護環境整備」には「郷土資料館の拡充」があり、当館において近年発生する大型災害等に対応するため収蔵資料の保全対策は急務であった。特に収蔵庫が地下に設置されていることから、具体的な対策が急がれた。ここでは、2ヶ年にわたり実施した収蔵庫等施設の改修工事（表1）のうち収蔵庫防水扉設置工事について報告する。

表1 収蔵施設等施設改修工事一覧（*は付帯工事）

工事内容	場所	竣工日
郷土資料館収蔵庫防水扉設置工事 *電気設備工事	第1、第2、第3収蔵庫	平成30年3月28日
名塩和紙学習館空調設備改修工事	展示室、集会室等	平成30年6月29日
郷土資料館収蔵庫除湿機設置工事 *電気設備工事	第2、第3収蔵庫	平成31年1月10日
郷土資料館収蔵庫シャッター改修工事 *電気設備工事*泡消火設備工事	第4収蔵庫	平成31年2月1日
郷土資料館収蔵庫移動書棚設置工事 *照明器具増設等工事	第2収蔵庫	平成31年3月4日

●経緯

東日本大震災の被害状況から、津波への災害対策が検討された。所在地が海拔4メートルと低地であるため、浸水は回避できないが侵入水量を軽減するとともに収蔵資料の流出を回避することを念頭に改修工事計画が進んだ。これは当館の収蔵庫扉が第1収蔵庫を除き教育文化センターの共通の仕様で、津波が引いたときには簡単に破壊されることが想定されたためである。

●収蔵庫について

当館の収蔵庫は、西宮市教育文化センター（地上3階、地下1階）の地下1階部分にある。それぞれの収蔵資料については表2に掲載した。防水扉は前室2の入口と第3収蔵庫の入口の2箇所を設置した（図1）。

●工事の内容

既存の扉を撤去し、浸水防止ドアを設置した（図2）。
浸水防止ドア：三和シャッター製（ウォーターガードWタイトドア）

サイズ (cm): W1,900×H2,781 (前室 2 入口) W1,600×H1,915 (第 3 収蔵庫入口)

設計: 西宮市土木局営繕部公共施設保全課

施工者: 大山サッシ工業株式会社

●防水扉の性能

洪水・豪雨などの水害発生時に建物への浸水を防ぐもので、浸水深 3m まで対応している。

建材試験センターにおける浸水防止ドアの技術評価 HWL (3.0) 4 等級 (扉水没時は 3 等級) を取得している。

●竣工後の対応

扉の重量が増となったため、職員一人での開閉が困難になった。

扉用ストッパーは、タイヤストッパー (ゴム製) を用いている。

框の高さが 15.5cm になったため、資料の搬出入時の台車の操作は車椅子用のスロープを設置して行っている。

表 2 収蔵する主な資料

収蔵庫名	主な収蔵資料
第 1 収蔵庫	古文書、絵図、教科用図書
第 2 収蔵庫	図書資料 (移動式書架設置)
第 3 収蔵庫	民俗資料、教育史資料、戦時生活資料
第 4 収蔵庫	考古資料、民俗資料

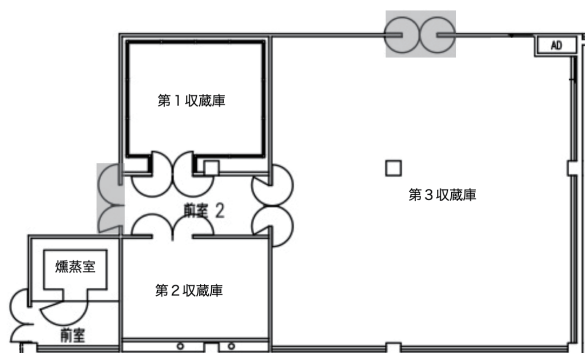


図 1 防水扉設置箇所 (網掛け部)



図 2 前室 2 入口扉 (左: 改修前、右: 改修後)



目次 CONTENTS

太閤窯製の花入と陶工・小西平内 (笠井今日子) …1

収蔵施設の機能向上について～収蔵庫防水扉設置工事～ (俵谷和子) …7

西宮市立郷土資料館ニュース第 51 号 令和 2 年 (2020 年) 3 月 31 日